
守護るべきもの

にゃんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守るべきもの

【Nコード】

N0368B

【作者名】

にゃんこ

【あらすじ】

如月無月と如月祢音は両親がある特殊な職業に就いている以外はごく普通の中学生だった。ある事件が起こるまでは・・・

第1話（前書き）

この小説は以前某サイトで公開したのですがここでの公開にあたって目的などの大まかな設定はそのままに改訂版となっております。

第1話

「はあゝ学園、メンドくせえな」

夏休みが迫っている7月の雨が降りしきる中旬、

2人の学生が学園までの並木道を歩いている。

肩まで伸びた黒髪の少年が目にかかる髪をどけ、

目の前を激しく降る雨をうつとうしそうに見ながら言う。

この少年の名前は『如月無月』水月学園に通うある1つの状況を除けば平凡な中学2年生だ。

「そんなこと言わないの。もうすぐ夏休みなんだから頑張りなよ」

そう呟く無月の肩をポンと叩いた肩胛骨辺りまで伸びた茶色の髪を持つ少女は『如月祢音』。

名字でわかるように無月の妹。

ちなみに同じ年に生まれたため、無月と同じ中学2年生でしかも同じクラスである。

「メンドくせえもんはメンドくせえんだよ。こんな雨の日なんか特に気が滅入る」

そう言う早足で並木道を歩いていく。

「はいはい。相変わらず物臭だね、お兄ちゃんは」

そう言うと祢音も後を追って早足で歩き始めた。

く水月学園く

「よっす」

「おう」

いつも話している友達に短い挨拶を済ませると無月は自分の席にっていた。

そして長く面倒な授業が始まると、睡眠授業で済ませる。

たまに教師からの激烈な洗礼を受けるがお構いなし。

そして昼休み、無月は友達と食堂で昼飯を食べていた。

「相変わらずお前は寝てばかりだな」

無月の向かいに座る無月の友達の康宏がカレーを一口分頬張って話す。

「物を口に入れて喋るな」

無月はうどんを食って割り箸で康宏を指しながら言う。

「それでも成績が学年トップクラスってのはいいよね」

無月の隣に座って康宏と同じくカレーを食っているのは祐介。

「お前も成績いいだろが」

と一言言って無月はうどんをすすする。

「それでも無月には敵わないよ」

から笑いのような笑いをして祐介も食べ始める。

そんな感じで昼休みは過ぎていきそして午後の授業を過ぎていった。

放課後無月はどこの部活にも所属していないのだが祢音が吹奏楽部であるため、

気がつく頃には何故か部活が終わるまで待つという約束ができていた。

その間、無月は校内をぶらぶらするなり、康宏たちと雑談するなどして時間を潰していた。

「おまたせ、お兄ちゃん」

廊下をぶらぶらしていると後ろから聞こえてきた声に振り返ると祢

音が立っていた。

「終わったか。んじゃ、帰るか」

「うん」

事件が起こったのはその夜の事だった。

特殊な職業に就いているため兄妹の両親は朝早くに出かけ、夜遅くに帰ってくる。

朝食は母が作ってくれるが夕食はいつも祢音が作っている。

そしていつも通り2人で夕食を食べている時だった。

ガシャーンという窓の割れる音と共に武装した男が5人ほど入ってきた。

無月と祢音は椅子から降りて男たちを見る。

「誰だ!!」

その無月の叫びを無視し男たちは真っ直ぐこちらに歩いてくる。

「こっちにくるな!」

と無月は叫んだ瞬間、男たちの一人がゴツい拳銃を取り出し無月の頭に銃口を突きつける。

「黙れ。死にたくなければそこを動かず黙っている」

「うつ……」

銃口を突きつけた男が他の4人に祢音に向かって顎をしゃくると4人は祢音に近づく。

「いや……来ないで」

祢音は呟くような細い声で言うが男たちは躊躇わず祢音の体を掴み、口の辺りにハンカチを当て祢音を眠らせるとそのまま連れだそうとする。

「おい！祢音をどうする——」

無月は叫ぼうとしたが、銃の先端で頭を突かれ後退る。

「小僧、黙ってろって言っただろ？」

「く……」

「よし、行くぞ」

という他の男に言われ無月に銃口を突きつけている男は振り返り外に出て行った。

「くそっ！待てよ！！」

無月は男たちを追って外に飛び出し一番後ろの男に飛びかかるようにするが、

ダァン

「ぐあ……」

男の中の誰かが撃った銃弾が横つ腹に命中する。

「おい、あまり音を出すな。気づかれるだろ」

「すまん」

薄れゆく意識の中、無月が見たのは、

男たちにトラックの荷台に乗せられる祢音の姿だった……ん……。

第1話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

まだブログのような物なので不明な点は多々あるでしょうがいずれわかっていきますので楽しみにしていってください。

第2話（前書き）

ここ数話は改訂版とゆうより修正版となりそうです・・・

第2話

「…つき…………むつき……………」

（誰かがオレの名前を呼んでいる）

「無月！」

うつすらと目を開けると茶色で短髪の男性と

腰辺りまである長い黒髪の女性が心配そうにこちらを見ていた。

「父さん、母さん」

ゆっくりと呟くように無月は言う。

茶髪の男性の方が無月の父『如月日向』で

黒髪の大和撫子という表現がピッタリの女性が母の『如月桔梗』である。

「「無月！」」

2人は同時に無月の名前を叫ぶ。

「ここは？」

見回すと無月は白い部屋の白いベッドに横たわっているようだった。

「病院だ。お前は昨日、家の前で腹を撃たれて血だらけになって倒れてたんだ」

「そうか……オレは昨日……」

無月は天井をしばらく見て思い出したように叫ぶ。

「祢音!!」

無月は飛び上がるように上半身を起こす

「うっ」

が、横っ腹の痛みで再び横たわる。

「まだ無理しないで、手術したばかりなんだからまだ動いちゃダメよ」

桔梗が優しく諭すように言う。

「祢音はどこに行った？」

「居場所はもうわかってる。オレたちは魔法使いだからな、簡単な事だ」

無月の両親は魔法使いなのだ。

それも魔法使いだけで形成された組織のトップである総帥と総帥補佐である。

そう、あらずじにもある『ある職業』とはこの事。

「それに理由も見当はついているのだが……」

日向は齒切れ悪く、途中で話をやめて少し顔をしかめる。

「どうした？話を続けてくれよ」

「いや、間違えた。理由はわかってない」

日向は前言を撤回し話を続ける

「居場所はまだわかってるし、

戦力はそれほど無いようだから近日攻め込み、祢音を救出する」

「オレも行く！」

無月は身体を起こすが再び腹の痛みで寝込む。

「だからまだ動いちゃだめって言うてるでしょ。傷口が開いたらどうするの？」

「お前は付いてこなくていい。邪魔なだけだ」

日向はスッパリと却下する。

「オレも強くなる！父さん、オレを今すぐ強くしてくれ！」

日向はしばらく考え聞き返す。

「強くなっても殺されるかも知れんぞ。」

それほどオレたちの生きる世界は厳しい。それでもか？」

「それでもいい。オレは祢音を助けるまで死にはしない。祢音はオレの守護るべき人だ」

日向は桔梗と顔を見合わせしばらく考えそして結論を出す。

「いいだろう。お前が退院した後すぐに修行をする。1週間で幹部クラスにしてやる」

「ありがとう、父さん、母さん」

無月は少し微笑み2人に感謝の言葉を言う。

「さて、わしは仕事があるのでな。先に帰らせてもらう」

日向は振り返り扉へと向かうそして横目で無月をちらりと見る。

「お前が退院した日から修行を始める。覚悟しておけ」

「わかった。待ってるよ」

「ふ、さすが我が息子だ」

そう言って日向はにやりと笑い、扉を開いて病室から出て行った。

「本当に大丈夫？ケガだって治りきってないのに修行だなんて」

桔梗が心配そうに無月に問う。

「大丈夫だよ。オレは2人の息子だぜ。祢音だって娘だろ。信頼してよ」

「そ、そうね」

桔梗は少し納得してないような気がしたがとりあえず納得してくれたようだ。

「じゃ、母さんも仕事があるから帰るわね。無理しないでよ」

「大丈夫、大丈夫」

そう無月は言い桔梗を安心させ手を振る。

「じゃあね」

そして桔梗も病室から出て行った。

～退院の日～

担当した医者や看護師に見送られ如月親子は用意されていたリムジンに乗り込む。

車では運転手が無月に退院祝いの言葉をかけた。

「では、頼みましたよ」

桔梗を家まで送り、再び車は走り出す。

そして着いた場所は何の変哲もない神社だった。

「なんだ、ただの神社じゃないか」

車を降りた2人は運転手に礼を言って神社へと歩き出す。

「ただの神社じゃない。この中は時間の流れが遅くてな。」

現実の1日がこちらでは約4日程度に感じる。つまり、1週間で約1ヶ月になる」

2人は神社の鳥居の目の前まで来る。

「では、行くぞ」

日向が鳥居をくぐろうとすると日向の姿が消える。

それに続いて無月も鳥居をくぐる。

そこは外部からは遮断された洞窟であった。

「さて、まずはお前の力を見せてもらおうぞ」

日向は魔法で刀を出すと無月に投げてよこす。

「剣術ぐらい少しはやってきたであろう?」

そう言って日向はコートを脱ぎ無月と同じように剣を出す。

「ああ、ケガしてもしらないぜ」

「ふ、楽しみだな」

「ま、所詮剣術レベルではこの程度だな」

全く歯が立たなかった。

傷一つ付けるところか逆に疲労で無月が倒れそうだった。

「さて、修行はここからだぞ。もう根を上げたのか？」

日向は刀を杖代わりにし、ぜいぜいと息をしている無月に言った。

「まだだよ」

「休憩している暇はないぞ。ノルマは1ヶ月で幹部クラスだからな。奥へ進むぞ」

日向はさっさと奥へ進んでいく。

「ああ」

無月はフラフラしながらもついていく。

くそれから1週間（1ヶ月）が過ぎたく

無月と日向と桔梗は敵の本拠地の前にいた。

桔梗も付いてきていた。

「親父、母さん、仕事はいいのか？総帥だろ？」

傷だらけの無月は日向、桔梗を見上げ聞く。

「今のわしは総帥などではない。他人よりかなり強いただの親父だ」

「私もかなり強いただの母親ですよ」

「そっか」

無月は刀を出す。修行の終わりの日、日向がくれた特別な日本刀『夢羅雨』。

「ではお前の想いの強さ、見せてもらっぞ」

「祢音を必ず助け出しますよ」

「ああ」

そう言って3人は敵の本拠地へと走っていった。

第2話（後書き）

無月、日向、桔梗の3人はいよいよ敵の本拠地に突入！果たして祢音を助け出す事ができるのか！？

第3話

「さて、いくとするか」

3人は敵本拠地へと走り出す。

「おいでなすつたぞ」

目の前に剣士や鎧兵士の亡霊が土人形となり現れる。

「多いな。突っ込むぞ」

土人形の数はおよそ500体。まだ次々と出てくる。

「我が大鎌『デスサイズ』の餌食となるがいい」

日向は魔法で大鎌を取り出し一振りすると衝撃波が鎌の刃の形となつて飛んでいき土人形を薙ぎ倒す。

そして新たに銃を持った土人形が数体現れ桔梗へ撃ってくる。

しかし何故か銃弾は桔梗の前で弾かれる。

「そのような攻撃、私の『ヴィーナス』の前では無意味です」

桔梗は纏っている羽衣で銃弾を弾き落としたのだ。

「では、行きますよ」

桔梗は土人形の前まで迫り羽衣を振ると土人形は羽衣によって斬られ崩れていく。

「うおおおお！」

無月は土人形を斬りながら突き進むが数が多すぎる。

鎚を持った土人形が無月の隙を狙い、攻撃をする。

「うあっ！」

攻撃を受け、無月は遠くへ吹き飛ばされる。

「数が多いな。桔梗！」

日向は後ろのほうで戦っている桔梗へと叫ぶ。

「わかりました」

桔梗は一度小さく頷きオカリナを取り出して奏で始める。

――未だ天に召されぬ魂よ　この響きによって裁きの門へと導かれよ――

『鎮魂歌』

辺りに優しいオカリナの音色が響き渡る。

すると土人形が次々と崩れていきあれだけあつた土人形は全て消えていった。

「すげえ……」

「無月、驚いている場合じゃないぞ」

「早く祢音を助けるんでしょ」

そして本拠地へ入っていった。

本拠地はそれなりに大きな研究所だった。

「来るな……」

「気をつけて下さい」

すると地面から翼が生えたライオンや甲羅を背負った虎、

など様々な獣が合成された獣たちがうじゃうじゃと現れた。

「奇妙な奴らだな」

「ここは元々そういうのを研究する施設だからな」

獣たちは唸り声を上げ獲物を狙う時のように睨んでくる。

「来るぞ！」

そして獣たちは大きな口を開け襲ってくる。

「はあっ！」

日向は大鎌の刃を獣へと刺し引き裂く。

「うらあ！」

無月は刀を振り上げ獣を切り裂く。

「ふふ」

桔梗は微笑みの内側に殺意を秘めながら羽衣で獣を斬っていく。

しかし獣たちはまだまだ出てくる。

「これでは時間が掛かりすぎる！急いであるというのに！」

「まあそう焦るな。『ソニックスピード』」

すると日向が音の様に速いスピードで獣達を切り裂いていく。

そしてほんの少し経つと目の前には獣達の残骸のみとなった

「速い……」

「これぐらいで驚いてもらっては困るぞ」

いつのまにか無月の隣に立っていた日向は無月に向かって笑う。

「さて、どちらへ行きましょうか？」

辺りを見回すといくつもの道に別れておりその先には部屋があるようだった。

「どこに行くんだ？」

無月は道を見渡しながら2人に聞く。

「まずは手当たり次第探してみましよう」

「分散して探すか？無月も十分一人で戦える力を持っている」

「ではそうしましょう。祢音を見つけ次第携帯で連絡すること」

そして3人は別れて探すことにした。

く桔梗SIDEく

「さて、どこへいきましようか」

しばらく桔梗はてくてくと廊下を歩くと一つの看板が目に入る。

それは『合成獣開発部』とか書かれていた。

「入ってみましょうか」

そして桔梗は扉を開け部屋に入った。

「あらあら、物騒な」

その部屋は広々としており、

一つのでかいカプセルのようなモノの中に色々と合成された1匹の
気味の悪い獣が入っていた。

「趣味の悪い研究ね」

桔梗は部屋を見渡すが人の気配はなく、部屋は空っぽだった。

「ふんふん。何にもないわね」

桔梗は机の書類をふんふんと頷きながら書類を眺める。

「!？」

桔梗が手にした書類の一つに『人間と獣の合成について』と書いて
ある書類があった。

「なかなか興味深いわね」

そこにはこう書いてあった。

『我々は獣同士の合成には成功したが人と獣の合成には失敗するばかりであった。』

合成に成功したとしても出来上がった実験体は理性を持たないただの殺戮人形となるばかりであった。

我々は人並の知能を持ち人以上の戦闘力を兼ね備えた兵士を作り出したかった

そこで我々は合成ではなく一から作り出すことを決定した』

文章はそこで途切れ次の紙はなかった。

「ふうん、なるほど」

桔梗は書類を放し机に置いた。

書類はパサツと音を立てた。

音を立てた瞬間、部屋へ人が続々と入ってくる。

「侵入者だ！撃ち殺せ！」

防具を装備した警備兵がマシンガンを放ってくる。

「あらら、見つかったやいましたか」

桔梗は羽衣を盾とし、銃弾を防いでいく。

「そんなものは壊しますよ」

桔梗は警備兵へと銃弾を弾きながら近づいていき、マシンガンを斬る。

「さつさと逃げないと、死んじゃいますよ」

桔梗は警備員へ殺意満々の笑みを浮かべる。

「くっ」

警備員は部屋の一角にあった赤いスイッチを押す。

すると、部屋にあったカプセルが割れ合成獣が動き出す。

「オオオオオオオ」

獣は唸り声を上げる。

先ほどの獣たちとは違い、いくつもの獣が合成されていた。

「かかってきなさい」

そして獣は桔梗へと襲いかかる。

スピードはとても速く桔梗目掛けて右手で殴ってくる。

桔梗はひらりとその攻撃を避けるとその攻撃は部屋の壁へ当たり壁は粉々になる。

「スピードはチーター、パワーはゴリラの如し、ですかね」

桔梗は羽衣を振り獣へと攻撃するが獣は飛び立ち攻撃を避ける。

「それは何の翼かしら？」

獣は急に方向転換し左手のライオンの爪で斬りかかる

しかし桔梗は攻撃をさけると左腕を斬り落とす。

「グオオオオオオ！」

切り口からは血が溢れ出し獣は低い叫び声を上げる。

「これでどう？」

桔梗は獣の腹へと攻撃を仕掛けるが攻撃は弾かれてしまう。

「亀の甲羅、その防御力たいしたものですな。しかし」

続いて桔梗は右腕を攻撃し斬り落とす。

右腕は左腕と同じように血が噴き出し獣は叫び続ける。

「首を落とせば問題ないですね」

そして桔梗は虎の頭、その首筋を狙い羽衣を振ると首はポトリと音を立て落ちる。

「所詮、獣ではこの程度の力しかないようですね。さてここにはもう用はないですね」

桔梗は扉を開き部屋から出て行った。

第4話（前書き）

今回はちょっと短いかも・・・

第4話

～日向SIDE～

「うむ、どこを見て回るか」

日向はブラブラと廊下を歩き、部屋の看板を見て回る。

そして『人工生命体生成部』の部屋の前で立ち止まる。

「ここか？」

日向はニヤリと笑いながら部屋の扉を開ける。

中は機械のベッドがいくつもあり、

そこにはボロボロになってゾンビのような人が横たわっていたり、

カプセルに入れられた小さな人のようなもの（試験管ベイビーというものだろうか）があった。

「まったく、奇妙な研究してやがる」

日向はそのベッドやカプセルを見ながら歩いていく。

「ま、こちらも人の事は言えんのだがな」

ふふ、と鼻で笑い日向はデスクのファイルや引き出しを漁る。

「これだな」

日向は手に取ったファイルの一つを開く。

日向が開いたファイルの表紙には『生命体の人工生成』と書いてあった。

『我々は合成獣開発部の依頼により獣のDNAを組み込んで人間を作り出すプロジェクト

を始めることとした。

まず受精卵に人間とよく似たゴリラのDNAを組み込もうとしたが、

その卵は成長することがなくそのまま死滅してしまった。

その後、我々科学者にとって気は進まないが魔法を使うことができる研究員を呼び出し、

一から人間を魔法によって作り出すのは並の集中力ではできるはずがなく担当した魔法使いは2人のみだった。

生成を始めたが出来上がるのはせいぜい足などの一部で魔法を使っても人間を作り出すことはできなかった。

我々は人間を研究するため生きている人間の臓器を抜き取り死んだ人間に

魔法製の臓器を入れ込み魔法で生き返らせそのまま臓器が使えるか、

という実験を行った

しかし、失敗するばかりで実験体が使えなくなるまで何度も実験が行われた。

そして2人の魔法使いも魔法の使いすぎなのか衰弱し死んでしまった。

途方に暮れていたある日、ある秘密組織が人工生命体の生成に成功したという知らせが入った。

我々はその組織の一人を捕らえ捕虜から居場所、IDナンバー等を得、スパイを送り込んだ。

スパイからの報告によると彼らが作り出した生命体は我々のように魔法で一から作り出たということ。

そして完璧であり、問題なく育っているという事だけであった。

おそらく捕虜は権限が低いため多くの事を知ることができないようだ。

研究対象として十分使えるようになれば捕らえるという上からの報告があったが

成功か失敗かは未だに我々は知っていない』

「ほう、やはりスパイがいたか」

日向がファイルを置くとパタという音を立てる。

それを合図としたかのようにベッドに横たわっていた2体のボロボロ人間（以下ゾンビ）が動き出した。

「ほう、魔力を生气としたために我が魔力にでも反応したか？」

日向は大鎌を構え攻撃に備える。

「ウウウウウウウ」

ゾンビは気味の悪い呻き声を上げながらふらふらとこちらへ歩いてくる。

「はぁっ！」

日向は2体のゾンビを肩からナナメに2回斬ると2体は血を吹き出さずボトリと上半身が落ちる。

「この程度か」

日向はゾンビへ背を向け部屋からでようとする。

「ん、うおっ」

何かの気配を感じて日向が振り返るとゾンビが4体となり襲いかかってきた。

「くっ、まだいたか」

再び大鎌を振りゾンビたちに攻撃する。

そして4体のゾンビは真っ二つになる。

「これで終わりか」

しかし真っ二つに分かれたゾンビは上半身からは下半身が生え下半身からは上半身が生えてきた。

そしてゾンビは8体となった。

「ほう、並の再生能力ではなさそうだな」

「ウウウウウウウ」

そして再びゾンビたちは日向へと襲いかかる。

「斬るだけ無駄なことだな。さて、どうするか」

日向は大鎌をしまい、手首をくるくると回す。

「やはり、魔法しかないな」

『フリーズドライ』

右手を伸ばすと右掌から冷気が放たれる。

「これでどうだ」

ゾンビたちはこれでもかというぐらいカチコチに凍り動かなくなる。

「さて、ここにもう用はないな。次の場所へ行くとするか」

そして日向は部屋を後にした。

第5話（前書き）

衝撃の事実が明かされる第5話です

第5話

く無月SIDEく

「祢音！祢音！！」

無月は廊下の走りながら妹の名を叫ぶ。

「どこだ！どこにいる！？」

「侵入者だ！構えろ！」

走り回る無月の前に警備兵が現れる。

「撃てえ！」

警備兵は拳銃を無月に向けて放ってくる。

「邪魔だあ！」

無月は向かってくる弾丸を斬りながら前進する。

「うわあ、こっちに来るぞ」

「ひるむな！撃ち続けろ！」

警備兵たちは拳銃を撃ち続ける。

「当たるかあ！」

無月は銃弾を1発も身体に当てず警備兵の前まで来る。

「死ねえ!!」

無月は警備兵の目の前まで来ると一瞬にして警備兵たちを斬り殺した。

「ぐああ!!」

警備兵たちはバタバタと血を流して倒れていく。

「へっ、こんなもんかよ」

無月は倒れている警備兵を見下すように数秒見て再び走り出した。

「ここかぁ!!」

扉の一つをぶち破ると、

そこには多くの研究員と中央にクリスタルのような青い水晶体に閉じこめられた祢音がいた。

「お前ら…お前ら…お前…ら…」

無月の手は怒りによって自然と震えてくる。

「殺す…ころす…コロス」

怒りと憎悪が形となって身体から溢れてくるようだ。

そして無月の全身は怒りや憎悪による邪悪な炎に包まれる

「コロシテヤル!!!」

無月は赤く怒りの込められた目で睨むと、

邪悪な炎を纏った夢羅雨で研究員たちを斬り殺していく。

「うわああああ!」

「逃げろおおお!」

部屋に数多の悲鳴と血が飛び交う。

「コロシテヤルコロシテヤルコロシテヤル!!!」

次々と研究員や警備兵が殺されていく。

「うわあああああ!」

「助けてくれえ!!!」

「コロスコロスコロスコロスコロス!!!」

無月はほとんどの研究員たちを殺し残るはただ一人となった。

「シネエ!」

無月は最後の一人へと刀を振り下ろす。

カキイン

しかしその攻撃は金属音を立てて弾かれる。

「ナニ!？」

「ふふふ、私はそこのひよろい研究員ではありませんよ」

そうは言ったがそいつは眼鏡をかけ、白衣を着て体型はヒヨロリとした男だった。

その男はクリスタルの隣に立っており短剣を持っていた。どうやらそれで弾いたようだ。

「イモウトヲ…カエセ…」

無月は憎悪と殺気を込めた視線を送る。

「おお、怖い怖い。しかしあなたは間違っていますね。この娘はあなたの妹ではないようですが？」

「!？」

無月は振り上げている刀を下ろす。

「おやおや、知りませんでしたか？あなたとこの娘は血が繋がっていないのですよ」

「さて、研究の邪魔なのでここで死んでいただきましょうか」

そして研究員は無月を目掛け短剣を投げる。

カキーン

「「無月！！」」

そこへ大鎌で短剣を弾いた日向と桔梗が現れる。

「無月！どうした！？」

2人は膝をついて立ち尽くす無月へ駆け寄る。

「その小僧、こいつが人工生命体という事を知らなかったのですよ！？」

まったく、愚かなことだ！」

「ちっ！お前、無月にその事を教えたのか！？」

日向は未だ笑い続けている研究員を睨む。

「ああ、教えましたとも！

おもしろかったですよ。真実を知った時の彼の顔ときたら！！！」

「なんてことを…」

桔梗は無月の顔を心配そうに見る。

無月は意識がないように呆然としており目の焦点が合っていないようだった。

「そしてあなたたちはここで消え去る運命です。出でよ！我がしもべよ」

すると天井をぶち破り合成された獣が降りてくる。

その身体は銀色に輝く鎧を纏っており

ゴリラの身体に鷲の翼、チーターの足、腕は4本あり左手1は螭螂の鎌、左手2は蜂の針を装備したもので

右手1は熊の手、右手2は機械で作られ頭はカブトムシの角を持った虎の顔だった。

「これが私の最高傑作。キメラです。キメラよ、こいつらを殺してしまえ！」

「了解デス」

「喋った！？」

「そう！このキメラは不完全ではあるが人並の知能を持ったのですよ！」

研究員は両手を広げ自慢げに叫ぶ。

「桔梗、無月を連れて下がっている」

「わかりました」

桔梗は無月を抱いて部屋の端に座り込んだ。

「コ……ロ……ス……」

「さて、さっさと終わらせるか」

第6話

「さて、どうしてやるつか」

日向は一気にキメラの前まで迫り大鎌を振り足を斬り落とす。

「グギヤアアア」

悲鳴を上げ片足を失ったキメラは立っていることができないため倒れる。

「こんなものではないはずだ」

そしてキメラの足の切り口からは新たな足が生え始める。

「やはりな。ゾンビの再生能力付きか」

キメラは再び立ち上がりもの凄い速さで走り日向へ向かってくる。

そしてキメラは左手の鎌を振り上げ日向目掛けて振り下ろす。

「くっ」

日向が振り下ろされた鎌を避けるがつついて左から熊の手が襲いかかる

「ちっ」

日向は大鎌の刃を熊の手に向けるが熊の手は鎌に斬られるもそのま

ま日向を吹き飛ばす。

「ぐああ」

攻撃をくらった日向は地面を擦りながら滑るように飛ばされた。

そして斬られているはずのキメラの熊の手はすでに傷が癒えていた。続いてキメラは翼を使い飛びながら頭のカブトムシの角で日向目掛け刺してくる。

「ふっまだまだだな」

日向は寸前で避け飛びながらキメラの背後に回り込む。

日向はキメラが地面を突き刺した角を引き抜くという隙を狙い指先を地面へと向ける。

すると地面から木の幹のようなモノが生えてキメラを縛る。

「これでしばらくは身動きがとれんだろ」

日向は続けて指をキメラへ指すと指先から激しい炎が放たれキメラを覆い尽くす。

「まだ終わらんぞ」

さらに指先からは冷気が放たれ炎があっという間に消火されキメラは凍る。

続いて日向は大鎌をしまうと今度は大きな大きな鎚を出してくる。

「これでフィナーレだ」

日向は鎚を振り上げ凍ったキメラへ振り下ろす。

バキンという音を立て、キメラは凍ったままのいくつもの肉塊となる。

「終わったな」

日向は肉塊となったキメラに背を向け無月と桔梗へ歩き出す。

が、

「ぐうっ！」

日向の左腕に何かにかすったような傷ができる。

「まだか！」

日向の左腕に斬りかかったのはキメラの蜂の針のようになっている左手だった。

そして凍ったはずの肉塊は溶けており肉塊たちが集まり始めていた。

「ばかな！？肉塊としたはずだが？」

「ハハハ！私のキメラをそこのゾンビと同じにしてもらって困りますな！このキメラは並の再生力ではありませんよ！」

研究員が話している間にキメラはほぼ元の姿に戻っていた。

「ぐああ！」

戻っていなかったゴリラの腕が飛び日向を殴る。

「？ 避けきれなかった……」

「どうやら効いてきたようですね！蜂の毒が！

かすりさえすれば毒は体内に入り身体を麻痺させることができるのですよ！！」

さらにキメラは機械の腕をウィーンという音を立て、

エネルギー砲のようなモノに変化させ、倒れている日向へと向け構える。

そして発射口からはエネルギーと思われる光が集まってくる。

「ガアアアアア」

キメラは雄叫びを上げエネルギー弾を放つ。

「くっ」

「させません！」

日向の前に桔梗が立ち結界を張ってエネルギー弾を防ぐ。

「うらあああ！」

そして無月がキメラの目を刀で刺した。

「ギャアアアア」

キメラは悲鳴を上げて首を振り無月を振り落とそうとする。

「うわあああ」

無月は刺さった刀を持って耐えていたが刀が抜け、日向と桔梗の方へ飛んでいく。

しかし無月は体を反転させ着地する。

そしてキメラの目はすぐさま再生する。

「無月、もう大丈夫なのか？」

桔梗に魔法で治療されている日向は言う。

「ああ、親父には色々聞きたい事があるからな、ここで死んでもらったらオレが困る」

「そうか。覚悟しておくか」

日向は桔梗による治療を終え、立ち上がり無月の隣に立つ。

「それでは私に考えがあります」

桔梗は2人の後ろに立ち話し始める。

「――です」

「そうか、危険だが、まかせたぞ」

「大丈夫なのか？それは」

「危険だが、うまくやれば問題ない」

「では、行くぞ。無月」

「ああ」

そして、2人はキメラへと向かう。

キメラは4本の腕を使い2人に攻撃しようとするが無月と日向は腕の間を通ったりして攻撃を避け続ける。

それがしばらく続いた時

「準備完了です」

後ろの方で呪文を唱えていた桔梗が合図を出す。

「よし、無月離れるぞ」

「OK」

無月と日向はキメラから離れる。

桔梗の背後にはうつすらと巫女姿の女性の姿が浮かび上がっている。

「神の使い『卑弥呼』よ。世界の調律のため、あなたに力を貸して頂きたい」

その言葉に応えるように卑弥呼はゆっくりと頷く。

そして桔梗は両手を握り合わせ、卑弥呼も同じように祈る。

―神よ。私の声が聞こえているか―

―あなたの持つ異世界への扉を開いて頂きたい―

―異世界の扉よ、卑弥呼の祈りにより、今開かれよ―

するとキメラの真下に魔法陣が現れ中心から放射状に真つ暗な穴が広がっていく。

そして魔法陣は激しい稲妻を発しながらキメラをいわゆる掃除機のように吸い込もうとする。

そこら辺に横たわっていた死体や研究道具は次々と飲み込まれる。

「ちいつ、キメラ、飛べ！」

キメラは翼を広げ飛ぼうとするがその翼は根本から斬られる。

その翼はいつのまにか無月と日向が持っていた。

「これで」

「飛ぶことはできねえな」

飛ぶことのできないキメラは吸い込まれるように穴へ落ちていく。

「忘れ物だ」

離れた場所で無月と日向は翼を放るとその翼も穴へ吸い込まれていった。

「う、うあああああ」

叫び声のする方を見ると研究員が吸い込まれそうになっており機械に掴まって耐えていた。

「うわああああああ！！」

そして握力が尽きた研究員は一緒に吸い込まれていった。

すると魔法陣は消え、それに続くように卑弥呼も消えていった。

「ふう、終わったか…」

無月と日向は桔梗の元へと向かう。

「さつさと祢音を助けなとな」

祢音の入っていたクリスタルは高い所にあり機械で固定されていたため吸い込まれていなかった。

「祢音！」

無月は刀でクリスタルを斬りると中から祢音を引きずり出して地面に寝かせる。

そこで気付いたが、祢音は外からは青いクリスタルでよく見えなかったが

やはり身体を研究するには衣服は邪魔であつて……………まあ全裸と
いうことである。

「あゝ……………祢音、生きてるか？」

目のやりどころに戸惑った無月は視線を逸らしながら祢音に呼びかける。

「お兄ちゃん……………？……………つてええ！？」

気が付いた祢音は自分の姿を見て驚く。

そして無月が傍にいることに気付くと次第に祢音の顔が赤くなっていく。

「お兄ちゃんのエッチ……………！！！！！」

バコオ

祢音の拳は唸りを上げて無月の顔の側面にヒットする。

「ぐはぁ！」

無月はきりもみしながら真横へぶっ飛んだ。

「祢音、これを着なさい」

どこから出したのか、桔梗は巫女服を祢音へ差し出す。

「お母さん、これは狙い？」

巫女服を着た祢音は首を捻るなどして自分を姿を見回す。

「ん？可愛いですよ？」

桔梗は笑顔で首をかしげる。

「まあ、そんなことはどうでもいい」

日向は殴られ気絶している無月の襟を掴み引きずりながら歩いてくる。

「あれ？そっぴやみんな揃ってどうしたの？ってゆうか……」

そう言つて祢音は3人を見て続いて荒れ果てた部屋を見渡す。

「お前はさらわれたんだよ。ここの奴らにな」

「へえゝ何で？」

祢音は状況が良くわかっていないのか、呑気に答える。

「それも含めて話がある」

そして気絶している無月を起こして日向は話し始める。

「さて、どこから話すかな……………」

第6話（後書き）

ちなみに次回が最終回となります

最終話（前書き）

これで最終話です。

最終話

「さて、どこから話すかな…」

日向を中心として無月たちは半円状になって座る。

「じゃあ、私がさらわれた理由がいい」

祢音がピシイと手を挙げて言う。

「そうか、ならそうしよう」

そう言っただけで日向は話し始める。

「祢音、お前がさらわれた理由とは言っただけじゃあお前が人工生命体だからだ」

「あ、やっぱり」

と、祢音はあっさり言う。

「知ってたのか？」

無月は祢音の顔を見て問いかける。

「うん、なんとなくだけど。」

みんなと違っただけで。おかしい力もあるしね」

おかしな力とは魔法のこと。

どうやら気付いていたようだ。

「そうか。」

ここの奴らは武装組織からの依頼で兵器等を作り出し売りさばくことを目的とした集団だ。

やつらはどこからの依頼で生体兵器を作ることになったようだ。やつらは見ての通り、先ほどのキメラのような合成獣を作り上げたわけだが、

人間というのは欲の深い生き物でな、今度は人の知能を持っている兵器が欲しいと言いつ出した。

当然、奴らは作り始めたわけだが、人並の知能を持った獣なんてのはそうそういない。

一から作るうとしたやつらだが、見た限りうまくいかなかったようだ。な。

そしてオレと桔梗の所属する組織『オルタナティブ』が人工生命体、つまり祢音を作り出した事をスパイを使って知ったわけだ。

そして、やつらは動いた。

祢音をさらって研究しどう違うのか知りたかったようだ。な。

違いを修正し、同じような生命体をつくるようだったが、オレたちがそれを止めたってわけだ」

そこで話が途切れ沈黙が流れる。

「質問あるかー？」

「私、ある」

そして祢音が再び手を挙げて聞く。

「私は人工生命体って言ったよね。何か違うの？」

日向はしばらく顎に手を当てて考える。

「そうだな。魔法が使えるのと、あとは秘密だ」

日向は意地悪そうな顔で祢音を見る。

「なんでー？」

「今知ったらおもしろくないし。言わなくても大丈夫だと思うからだ」

「そう」

そして再び沈黙が流れる。

「もう質問はないな。じゃあ帰るぞ」

日向は立ち上がり出口へ向かって歩き出し3人もそれに続いて研究所を後にした。

その夜、夕食を食べ終え4人はリビングに集まっていた。

「話があるのだが、無月に祢音、『オルタナティブ』に入ってみないか？」

「「え？」」

2人が同時に聞き返す。

「元々そついうつもりだったのだが、言いそびれていたんだ。

いい機会だから聞いてみようと思ってな。どうだ？」

「オレは入るよ」

と、即座に無月は返事する。

「オレはこれからも祢音や親父、母さんを守護っていかなくちやならない。

強くなくちや守護れない。

だから強くなる。強くなつてみんなを守護つていきたい」

「私も入るよ。お兄ちゃんたちに守護られるだけじゃだもん。

私だつてお兄ちゃんたちを護つていくよ。一緒に世界を守護りたい」

日向は2人の眼を交互に見て言う。

「そうか、2人とも守護りたいものがあるんだな。お前たちの気持ちよくわかった。

では明日からお前たちは『オルタナティブ』の一員だ」

「はい!」「」

最終話（後書き）

皆様、この作品を読んでいただきありがとうございました。
しかしこれはまだ序章のようなもの。

しばらくの構想期間を経て新たに掲載しますので楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0368b/>

守護るべきもの

2010年10月9日08時23分発行